
Christmas songs 02

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C h r i s t m a s s o n g s 0 2

【Nコード】

N 8 8 2 3 Y

【作者名】

雛

【あらすじ】

クリスマスにちなんだ連作の恋愛短編集

一話完結。

これも、昔やってたサイトからの発掘品です。

0 1 元先生×元生徒

○ 0 2 ブラコン小学生とその兄

0 3 友達の兄×女子高生

順次あげていきます。

「雪、あなた、そのコート着ていくの？ケーキとりにいくだけなのよ」

ママが準備完了した私の姿を見て笑みを浮かべる。

「いいの。だって、このコート着たいんだもん。クリスマス・イヴだからいいでしょ」

真っ白いフード付のコート。すごくすごくかわいいの。

これは、今日、我が家に遊びにきた従姉妹の葵ちゃんがくれたばかりの物。

来年そうそうに結婚する葵ちゃんは、今引越しの準備中。それで私にいっぱいお洋服のお古を持ってきてくれた。このコートはその中の一着なの。葵ちゃんが高校あがるくらいまで着ていたんだって。もう見た瞬間に、一目惚れっていうくらい気に入ったんだよ。

葵ちゃんがくれたお洋服は、ママが私に買ってくるものより少し大人っぽくて、シンプルなんだけどこわいいものばかり。ちょっと流行おくれかもって葵ちゃんは言っただけ、そんなこと全然ない。全部、ものすごく気に入った。

その中でもこのコートは別格。

目に入った瞬間、あまりにも嬉しすぎて言葉が出なかった。

だって、このコートがもしデパートとかで売っていても、ママは絶対を買ってくれなかったと思う。白は汚れやすいし、よそゆき用でどこにでも気軽に着ていくようなものじゃないから。

真っ白でマントみたくなっていて、フードのところにふわふわのフェイクファーがついているの。

葵ちゃん曰く、『一歩間違えるとてるてる坊主』だそうだけど、でも、本当にすごくすごくかわいい。きっと葵ちゃんも大事に着ていたんだと思うの。だって汚れやすい白なのに全然シミとかなくてきれいだったから。

「デートじゃなくて残念ね」

デートというひびきにはあこがれるし、クラスの子の中にはもう彼氏がいる子もいたりするけど……でも、私には全然実感がわかない。

クリスマスだって、家族でクリスマスメニューの豪華ディナーとケーキを食べて、それからプレゼント交換して……それだけで十分楽しみだから。

「いいの。雪にはお兄ちゃんがいるもん。明日はお兄ちゃんとデートだもん」

二歳年上のお兄ちゃんは中学生。サッカーが大好きで、選抜チームに選ばれてがんばっているの。

そのお兄ちゃんの練習は午前中で終わり。だから練習終わった午後は銀座のソニプラに連れて行ってもらう約束をしている。いろいろ面白い物するんだ。

松屋とか三越とか和光とか、きつとツリーがいっぱいでキレイだとおもう。

「本当に雪はお兄ちゃん子よね」

だって、雪、お兄ちゃんが一番好きだもん。もうママなんて耳タコになってると思うから言わないけど。

仲良しの恵理ちゃんと同じクラスの小津くんのが好きなんだ

って。

でも私にはそういうのよくわからない。好きか嫌いかの二択で言えば、クラスの大半の男子は好きだと思う。でも、つきあうとかつきあわないとか、そういう対象じゃない。

グループ交際っていうか、男の子も女の子も一緒に遊びに行ったりもするけれど、本当は私はお兄ちゃんとおでかけする方が好き。お兄ちゃんは日曜日はいつも部活だから滅多にそんなことできないけど……。

「だってお兄ちゃんが一番かっこいいもん。だいたい、この齡から彼氏とデートなんて言ったらパパ卒倒しちゃうよ」

同じ年の子なんて全然子供っぽいし……お兄ちゃんよりかっこよくて優しい人なんていないもん。

「そうね……それに浩一も絶対うるさいわよ」

私とママは共犯者みたいに視線を交わした。パパとお兄ちゃんは、2人とも私にもものすごく甘くて、それから超がつくくらい過保護だった。

「いつてきまゝす」

いつてらっしゃいの声を背に聞いて、玄関の外に足を踏み出す。まだ6時になったばかりなのに外はもうすっかり暗かった。

ほおつと吐いた息が、夜の中でも白く映る。

頬を撫でたその風の冷たさに首をすくめた。でも、お気に入りの白いミトンが風の入り込む袖口を、フェイクファーのイヤーマフが耳をしっかりと防寒していたから大丈夫。

ピカピカと点滅するライトに飾られた道を早足で急いだ。

映画で見た外国のおうちみたく、最近、このへんの家の庭も12月になるとクリスマスデコレーションが盛んだ。生垣にライトをからませているだけのシンプルなお庭もあれば、スノーマンやサンタの人形が飾られていたり、ミッキーやミニーのプレートが飾られたりしているお庭もある。

我が家もちろんママが率先してパパとお兄ちゃんに飾り付けさせていた。テーマは白雪姫。何のことはない庭にいつも置いてある陶器製の小人の人形をクリスマス用に飾りつけただけのこと。ただし、小人は6人しか居ない。1人はお兄ちゃんが庭で蹴っていたサッカーボールの餌食になったから。

駅前の賑やかな通りの方からジングルベルやクリスマスキャロルとかのいろんなクリスマスソングが音声多重で聞こえていた。

音の震源地は、不二屋とかケンタッキーとかモス……きつとサンタの格好をしたアルバイトのお兄さんやお姉さんが店頭販売をしているに違いない。

我が家がケーキを頼んだのは駅前からちよつと入ったとこの地元
のケーキ屋さん。

デパ地下で買う有名店のケーキもおいしいけど、私はこのケーキが一番好き。絶対に隠れた名店だと思う。特に苺ショートじゃ絶品なの。

見た目は他のお店と変わらない苺ショートなのに、苺はちゃんと甘くてクリームは甘さ控えめでスポンジはしつとりとふわふわ。その三つが重なると、もうほつぺた落ちそうなくらいおいしい苺ショートになるんだよ。

これまでいろんな店の苺ショートを食べたけど、これよりおいしい苺ショートにはまだお目にかかった事がない。甘いモノが苦手なパパだって、このケーキは大好きだもん。

弾んだ足取りで通い慣れた……でもいつもと様子の違う道を急ぐ。駅前はどうど電車が着いたばかりだったのか人があふれていた。それもカップルが多い。あと、やっぱりケーキやケンタッキーの袋を抱えた人。

クリスマスにチキンは付き物らしいけど、我が家はちゃんとターキーが準備される。ママが腕をふるう年に一度だけのスペシャル料理だ。外側をカリカリに焼いて、中がジューシー。付け合せは人参とポテトで、人参の型抜きは私がしたの。星型とお花。あんまり好きじゃない人参だけどなぜか型抜きすると平気で食べられるのが不思議。

駅の横を通り抜けていこうとして、電光掲示板の文字に目がいった。人身事故で電車が止まっているという。どうやら駅前にあふれている人々はその影響らしい。

「げーっ、電車止まってるじゃん」

ちよっただけ考え込んでしまった私の後ろで声がした。

振り向いたら、そこにいたのはスポーツコート姿の集団。ものすごく背の高い人もいれば、私の身長変わらなくらいの人もいる。みんな大きなドラムバックを肩に下げていて、ちよっとな近寄り難しい雰囲気だった。

（きっとサッカーの人達だ……）

お兄ちゃんとよく似たコートだったし、中にサッカーボールを持っている人もいた。でもどういうグループなのかな？部活と違って感じじゃないし、小学生から高校生……ううん、もしかしたら大学生

かもしれない人も混じってるし……。あ、でもあの人はコーチなのかも。

「……あつ」

そんなことを思って、そのコートの背に東京の文字を見た瞬間、小さく声が漏れた。思ったより声が響いたのか、数人の人が振り向く。

「雪……」

そこに、お兄ちゃんがいた。

「お兄ちゃんっ」

嬉しくなって、思わずお兄ちゃんに抱きつく。

「おまえ、何でこんなとこいるんだよ。もうこんなに暗いの……」

「クリスマスのケーキ、取りにきたの」

「……こんな暗いのに一人で来たのか？母さんは？」

「ママはおうちでお夕食のしたくしてるよ。雪が一人で取りにいつてくるって言ったの」

だってクリスマスだし……よそのおうちのお庭のピカピカ見たかったし……って言ったら、まったくしょうがねえなと言ってお兄ちゃんは口元に笑みを浮かべた。ちよつと困ったようなその表情がいつものお兄ちゃんだった。

一緒に帰れる？と聞いたら、当たり前だと笑って、それから、くしゃつと頭をなでてくれた。

「なあなあ、この子、桜庭の妹？」

急にのぞきこまれてびっくりした。お兄ちゃんのお友達らしい。

「……すっげー、かわいいー。あ、俺、神崎綾人、よろしくね」

その隣の茶色い髪の人がにこっと笑った。わけがわからなかったけど、小さく頭を下げた。お兄ちゃんのお友達だから無視したらダメだし。

「ねえ、ねえ、名前、何て言うの？」

すごい人なつこい笑顔で笑う。目のところに泣きボクロがある。あ、たぶん、この人は上代さんだ。お兄ちゃんの話によく出てくる。

「あの……」

どうしようと思ったたらお兄ちゃんがぐいっと私を腕の中に抱きこんだ。

私はクラスで真ん中よりちょっと前くらい。あんまり背が高くないからお兄ちゃんの腕の中にはすっぽりとおさまってしまっ

「上代、神崎、ウチの妹にちょっかいだしてんじゃねえよ」

「えー、ずりー桜庭、いいじゃん、紹介くらいしてくれたって」

「そうだよ。そんなかわいい妹いるなんて聞いてなかったぞ」

「えーい、寄るな。おまえらになんか紹介できるか」

「桜庭、横暴だぞ」

まるで子供みたいな言い争い。

「上代、いい加減にしろ」

落ち着いた声がお兄ちゃんたちの間に割り込んだ。

「キャプテン」

「妹尾……」

「すまないね、上代が怯えさせたみたいで……」

その人は膝をついて、私と同じ目の高さになってにこっと笑いかけた。

「別に、大丈夫です」

お兄ちゃんのコートをきゅっとつかんだままで、首を横に振った。だって、別に怯えてたわけじゃない。初めて会うお兄ちゃんのお友達だったから、どうしていいかわからなかっただけ。

「えーと、桜庭雪ちゃん？」

お兄ちゃんが呼んだ私の名前をちゃんと聞き留めたらしい。

「はい」

「沢森章といます。お兄さんのチームメイトです、よろしく」

ちょっと驚いた。だって、大学生とかコーチだと思ったから。だってチームメイトってことは15歳以下のはずだ。でも、中学生には見えない落ち着きようだった。

「こちらこそ、お兄ちゃんをよろしく願いします」

ぺこつと頭を下げた。

沢森さんは確かお兄ちゃんのチームのキャプテンのはずだった。
名前に聞き覚えがある、

ぷつと誰かが吹いた。

「……雪、俺は沢森に面倒なんてみてもらってないって」
「でも、一応、ご挨拶しとかないと」

そんなのいいんだよ。と、お兄ちゃんは肩をすくめて苦笑気味な表情で笑った。あ、今の、私の好きな笑い方だ。

「……じゃあ、俺、帰るから。こつから5分くらい歩けば地下鉄の駅あるから、急いでるんならそつちから帰れよ」

「おう」とか「じゃあな」とか、それぞれにみんながリアクションを返す。

「じゃあな、雪ちゃん」

「またね」

「今度、試合、見においで」

みんなが声をかけてくれたので、ちょっと嬉しかった。

「どうもありがとう。……あの、えつと……メリー・クリスマス」

笑いながら、みんなメリークリスマスと言ってくれた。

(……24……25……)

「……ねえ、お兄ちゃん。今度、お兄ちゃんの試合、連れてって」

ケーキの箱はお兄ちゃんが持ってくれた。重いバックを肩からかけてても、ケーキの袋を片手で持てるの。

(……26……27、28……)

だから私は手ぶら。あ、違う。右手はお兄ちゃんと手をつないでる。暇だから、駅からずっと目に付いたクリスマスリースの数を数えてみた。りした。

「ダメ。俺、おまえ連れて行ったら心配で試合どころじゃなくなっちゃう」

お兄ちゃんは本気でダメっていう顔をしていた。こういう時は何回言ってもダメなの。だけど、もう少しだけねばってみる。

「えー、でも、みんな見においでって言うてくれたよ」
「だーめ」

お兄ちゃんは、基本的に私に甘い。

「いい子にして見てるよ」
「だめだって」

ほら、困った顔してる。

「邪魔なんてしないよ」

「だめだよ」

もう一押し。

「どうしてもダメ？」

見上げて首を傾げる。

「……だめだよ。その代わり、明日、ケーキおごってやるから我慢しろ」

「わーい」

どこのケーキがいいかな？

クリスマスケーキは苺ショート系だから、チョコレートクリームがいいかな……でも、フルーツたっぷりのタルト系も捨て難いな。

「まだ、色気より食い気かよ……」

お兄ちゃんはやっとだけ呆れたような、でも、どこか嬉しそうな顔で笑った。

「違うもん」

だって、大事なのはケーキじゃないの。

喫茶店とかケーキ屋さんで、お兄ちゃんと一緒に食べるのが大事なの。

本当のデートみたいでしょ。

だけど、そんなこと教えてあげない。

「何が違うんだよ」

「な・い・しょ」

不思議そうに問うお兄ちゃんの間を見て、くすつと笑ってみせた。
お兄ちゃんの間が丸くなる。

(……33つと……)

うちの玄関のリースでちょうど33個目。ソロ目だ。ソロ目って
何かラッキーっぽい感じがする。

「雪」

「なあに？」

振り向いたらお兄ちゃんが少し照れたような笑みを浮かべて言った。

「その新しいコート、似合ってる」

「……えへへ。あのね、あーちゃんからもらったの」

「婆さんから？」

「うん。あーちゃん、来年結婚するでしょ。だから荷物整理してる
んだって、いっぱいお古のお洋服もらったんだ。今日、旦那さん
になる人と一緒に来たんだよ」

「へえ……」

お兄ちゃんを残念そうな顔をする。

「優しそうな人だったよ、旦那さん」

にこにこ笑顔の素敵な人。でも、実は隠れてちょっと性格悪そうだったけど、それは言わないでおく。

「俺も見たかったな」

「あーちゃんの中学の時の先生だったんだって」

私はとっておきの情報を教えてあげた。

「えっ」

「内緒でつきあってたのかな？お兄ちゃんも中学の先生と付き合ってたりする？」

「……んなわけねーだろっ。雪、おまえも来年中学生だけど、中学教師なんてぜったいにぜったいにダメだからなっ」

……お兄ちゃんは急にすごく真剣な表情になる。「大丈夫だよ、雪、あんまり年上すぎるの好みじゃないし」

「そんなこと言ったって、雪はかわいいんだから……。相手が何考えてるかわかんないんだから充分注意するんだぞ」

世の中口リコンってもんが溢れてるんだからなとお兄ちゃんは真面目な表情で言い諭す。お兄ちゃんは結構想像力がたくましい。

「大丈夫。雪の一番はお兄ちゃんだから……」

ねっ、と小さく首を傾けて笑って見せて、それからお兄ちゃんとつないでいた手を離して、玄関のドアを開けた。

「ただいま」

「おかえりなさい。あら、浩一、どうしたの？」

「……な、な、な、なんでもない」

お兄ちゃん、顔赤いよ。

私の一番はお兄ちゃんだけど、この分だとお兄ちゃんが一番も、
まだまだ私のものみたい。

(……簡単には、渡したりしないもん)

そう。そこんじよそこらの女の子になんか渡したりしない。
くすりと私は心の中で笑みを漏らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8823y/>

Christmas songs 02

2011年11月26日16時47分発行